

同窓生が語る宮澤賢治

村松舜祐教授と宮澤賢治・成瀬金太郎（1）

若尾紀夫（C昭39・院41）

プロローグ

盛岡高等農林学校の創設

初めに盛岡高等農林学校（以下盛岡高農）について簡単に述べておこう。盛岡高農は、明治35（1902）年3月に我が国最初の高等農林専門学校として設置が決まり、翌36年1月に玉利喜造農学博士が初代校長に任命された。同年5月には、84名の新入生（農学科30名・林学科30名・獣医学科24名）を迎えて授業が開始されたが、開校式は延期され明治38年5月に挙行された。その理由の一つは東北地方の冷害凶作（明治35年及び38年、東北は大凶作に見舞われた）であり、それが盛岡高農の重要な課題でもあった。

盛岡高農はなぜ盛岡に設置されたのか。岩手が東北農業の平均的性格を具備していること、東北本線の開通によって盛岡は交通の中心として発展していること、教舎・実験農場・演習林など広大な学校用地が確保できること、設立に対する地域の積極的な支援体制が確保されていたことなどが挙げられる。なによりも、その直接的な要因は深刻な凶作問題であり、度重なる冷害や干ばつによって疲弊していた東北農業の振興であった。

盛岡高農は、当初は3学科体制（農学科・林学科・獣医学科）で出発した。その後、明治42年、農学科は2部制（農学科第1部・農学科第2部）となり、大正2（1913）年には農学科第2部は独立、大正7年になり名実共に農芸化学科が誕生した。教授陣や諸制度、建物などの施設は、明治（創設・整備期）から大正・昭和初期（発展・拡充期）にかけて益々充実したものになった。大正末から昭和初期の上田の鳥瞰図からは、教舎や本館、学生寮、養蚕室、家畜病院、農産製造室、林産製造室、温室などほぼ完成した教育研究施設の全景が伺える。

初代校長である玉利喜造博士を初め、各学科には新進気鋭・个性的な多くの教授達が赴任してきた。鹿児島県出身の玉利博士は、東京帝国大学農科大学

農学科卒業（農学博士第一号）で盛岡高農の基礎を築いた人物であり、その校風・伝統は初代校長によって創り出されたといっても過言ではない。彼は農学者・農業指導者・社会学者として活躍し、当時の冷害凶作には関豊太郎教授を初め関係教授を各地に派遣して調査研究に当たらせ、自らも率先して冷害凶作研究に取り組んだ。玉利博士は厳格な教育方針（質実剛健・禁酒禁煙・冷水浴・一年生全寮制・特待生の優遇・修身講話など）のもとに、学生の人格陶冶に力を入れたことでも有名であるが、明治42年5月、鹿児島高等農林学校初代校長として転出した。

農学科及び農芸化学科の分野では、以下の教授陣が赴任し活躍した。佐藤義長（2代校長：農産製造学・肥料学）、山田玄太郎（植物・植物病理）、大森順造（養蚕・細菌学）、関豊太郎（地質土壌・物理気象・鉱物）、鈴木梅太郎（化学・植物栄養論・畜産）、村松舜祐（化学・農産製造・細菌学）、古川仲右衛門（土壌及び肥料学・化学及び化学分析）、小野寺伊勢之助（母校農学科卒：肥料学・気象学・化学）、門前弘多（母校農学科卒：昆虫学・動物学・養蚕学）、成瀬金太郎（母校農学科第2部卒：土壌及び肥料学・農産製造学・酒造論）、長谷川米蔵（土壌学・地質学・鉱物学）、岩田久敬（母校農芸化学科卒：食品化学・無機化学・家畜飼養学）。

当時東北の一地方都市に過ぎなかった盛岡の地。そこに創設された唯一の高等農林学校は、高度の農学教育機関として全国に知れわたり各地から秀才達が集まってきた。各学科とも競争率は高く、上田の杜の“銀杏の門”は狭き門であった。

関豊太郎教授

ここで関豊太郎教授について少しふれよう。関教授は、明治38年、農学科地質及土壌学教室に着任、明治42年に農学科が2部制に移行すると農学科第2部（後の農芸化学科）の部長に就任することになる。大正9年には退官して東京西ヶ原農事試験場に

転任した。関教授は、土壤肥料学分野の研究に生涯没頭した学者であった。盛岡高農には約15年間在籍していたが、その間、東北地方の冷害凶作に係わる気象(今で言う“ヤマセ”)とその予知に関する研究、岩手県稗貫郡の地質及び土性調査、火山灰土壌の研究、酸性土壌(賢治が「我が荒涼たる洪積不良土」と呼んだ不毛の酸性土壌)の改良、そのための石灰岩末の利用普及などについて精力的に研究に取り組んだ。これらの関教授の研究は、賢治の生涯に大きな影響を与えることになる。

村松舜祐教授

村松舜祐教授は東京帝国大学農科大学出身で、創設間もない盛岡高農に赴任した。村松教授は納豆博士として有名であるが、その経歴や研究業績、宮澤賢治・成瀬金太郎との関係については殆ど知られていない。そこで、村松教授を中心に宮澤賢治・成瀬金太郎、さらに彼らに係わる何人かの人物について述べることにする。

宮澤賢治と成瀬金太郎

宮澤賢治(明治29年～昭和8年)は、岩手県稗貫郡川口町(現花巻市)に生まれ、盛岡中学校を卒業後、大正4年4月、盛岡高農の農学科第2部(後の農芸化学科)に入学した。盛岡高農では、大正4年から大正9年まで、本科生(3年間)及び研究生(2年間)として在籍し関豊太郎教授から直接指導を受けたが、それは、丁度、関教授が退官する前の5年間であった。賢治は、専攻した農芸化学全般は勿論のこと、特に関教授からは「地質及び鉱物学・土壤学・気象学・物理学など」を学び、岩石や地質の実地見学や調査の指導も受けた。関教授は、国内外から数多くの岩石鉱物標本を購入し、また当時最先端の実験教材や書籍などを備え、研究や講義、学生の指導に当たった。その当時の物品や業績資料の一部は、農業教育資料館(旧本館)に保存・展示されている。

当時、学生は3年に進級すると得業(卒業)研究を行うことになる。各自は希望する教授に所属して研究課題をもらい1年間にわたり研究を行い、その成果を取りまとめて得業論文として提出することになっていた。賢治の得業研究は「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」で、古川教授が主指導教官になっていたが、関教授の指導も受けたと言われる。本科を卒業する時に、賢治は関教授の強い勧めで引き続き研究生として残ることになり、岩手県稗貫郡の地質及び土性調査に参加した。

このように、関教授は研究者(農学者・土壤学者)

及び教育者として賢治の生涯や作品に深く係わることになり、賢治が農民に対して行った肥料設計や稲作相談、酸性土壌改良のための石灰岩末の製造販売(東北砕石工場技師時代)などに役立ったと言える。関教授と宮澤賢治との関係については既に幾つかの論説があるので、それらを参考にして頂きたい。

賢治は盛岡高農時代、関教授はじめ多くの個性的な教授達の下で、当時としては最先端の学問を学び知識を吸収した。同時に全国各地から集まった志ある学友達からの影響も無視することはできない。中でも文芸同人誌「アザリア」のメンバーである保阪嘉内・小菅健吉・河本義行との親交は良く知られている。

大正4年4月、農学科第2部に入学した同級生の中に、香川県出身の成瀬金太郎の姿もみえる。成瀬金太郎は賢治とも親交があった。成瀬金太郎は村松舜祐教授の下で得業論文「清酒及醤油麹菌酵素ニ就テ」の研究を行った。彼は後に村松教授の薦めで母校盛岡高農に戻り教鞭をとり、村松教授と納豆製造の共同研究を行い、また実業家としても活躍することになる。これについては項目を改めて述べよう。

村松舜祐教授—略歴と業績—

略歴

村松舜祐教授は東京帝国大学農科大学(農芸化学科)で学んだが、在学中、誰の指導の下でどのような研究を行ったのか、所属教室や指導教授、得業研究についてはよく分かっていない。



東京帝国大学を卒業後、郷里に近い静岡県立農学校(教諭)に赴任した。静岡県立農学校は中遠簡易農学校(明治29年4月設立)を前身とし、現在は静岡県立磐田農業高等学校と改称され、長い歴史と伝統をもつ農学校である。当時は、「園芸」「種芸」「畜産」「養蚕」の4学科から構成されていた。彼はここで化学・肥料・土壌・鉱物・気象を担当していた。後に疑問になる「村松教授の納豆研究のルーツ」が静岡県立農学校時代ではないことは確認されている。それでは農科大学時代にあるのか?今のところ分かっていない。

- ・明治14年4月：現静岡県浜松市で誕生
- ・明治35年10月：東京帝国大学農科大学(農芸化学科)入学

- ・明治38年7月：同農科大学（農芸化学科）卒業
- ・明治39年7月：静岡県立農学校（教諭）赴任
- ・明治42年3月：静岡県立農学校（教諭）退職
- ・明治42年6月：盛岡高等農林学校（教授）赴任
- ・大正4年2月：農芸化学研究のため2年間米国留学
- ・大正9年9月：関豊太郎教授の後任として農芸化学部長に就任
- ・大正13年3月：農学博士の授与
- ・昭和7年3月：京都高等蚕糸学校校長として転出
- ・昭和20年3月：退官（京都繊維専門学校）
- ・昭和20年11月：叙正三位
- ・昭和21年2月：名誉教授（京都繊維専門学校）
- ・昭和40年5月：没（享年84才）

業績

村松舜祐教授は、明治42年6月、盛岡高農に赴任し、当初は化学を担当、後に農産製造を受け持った。その後、昭和7年の転出まで様々な講義を担当し、また学生の得業研究指導に当たっている。例えば、化学・分析化学・化学実験・農産製造・細菌学（以上大正7年）、農産製造学・生理化学・肥料学・有機化学と同実験・分析化学・化学実験（以上大正13年～昭和2年）などで、村松教授に限らず当時の教授は多岐にわたる分野を担当していた。

盛岡高農赴任以降の研究業績（著作・論文・論説）としては以下のものがあり、村松教授が植物栄養から土壌学・微生物・農産製造など農芸化学の幅広い分野に関心を持っていたことが分かる。この中で特に注目される研究は、宮澤賢治が関心を持った「飯米の精白法」と納豆製造に大きな功績を残した「納豆菌及び納豆製造法」である。これらの問題については引き続き詳しく述べよう。

- ・簡易植物栄養論：鈴木梅太郎・村松舜祐共著（明治44年）
- ・土壌学：麻生慶次郎・村松舜祐共著（明治45年）
- ・最新 納豆製造法：村松舜祐・成瀬金太郎共著（昭和12年）
- ・醤油の品質と其成分：盛岡高農校友会報 第10号（明治43年）
- ・麹菌及アスペルギルス・ニガールの発育に対する無機成分及窒素の作用：盛岡高農校友会報 第13号（明治44年）
- ・納豆の製造について（英文）：盛岡高農校友会報 特別号（明治45年）
- ・納豆の製法について（英文）：東京帝国大学農

科大学紀要 第5巻（大正元年）

- ・醤油諸味中に於ける微生物：盛岡高農校友会報 第20号（大正2年）
- ・砂糖の滴定法に就て：盛岡高農校友会報 第24号（大正3年）
- ・米国に於ける農産製造会社所見：盛岡高農校友会報 第32号（大正5年）
- ・渣乳の利用に就て：盛岡高農校友会報 第37号（大正7年）
- ・大豆の組成に就て（英文）：盛岡高農学術報告 第7号（大正13年）
- ・大豆の成分に関する研究：斉藤報恩会（大正15年～昭和3年）
- ・平麦の成分及び其の栄養価値に就て：盛岡高農学術報告 第12号（昭和3年）
- ・大豆に於ける特殊の成分に就て：盛岡高農校創立25周年記念論叢（昭和3年）
- ・竹稈の成分について：盛岡高農創立25周年記念学会（昭和3年）
- ・納豆に関する知見：日本学術協会報告 第5巻（昭和4年）
- ・飯米の精白法に就て：糧食研究 67:10-15（昭和6年3月）
- ・飯米精白法に就て：岩手日報（昭和7年3月）

参考資料

- ・回顧六十年：岩手大学農学部編（昭和37年）
- ・玉利喜造先生伝：玉利喜造先生伝記編纂事業会（昭和49年）
- ・岩手大学農学部七十五年史：岩手大学農学部編（昭和54年）
- ・農芸化学科の歩み：大矢富二郎著（昭和54年）
- ・関豊太郎と宮澤賢治：亀井茂、肥料科学 15:31-56（平成4年）
- ・冷害はなぜ繰り返し起きるのか？：卜蔵建治著（平成17年）